

「同窓会報 鰐陵」第57号（二〇一四年） 抜刷

〔特別寄稿〕

詩と考古学のワラジを履いて

三宅宗議（26回生）

二〇一五年二月

宮城県石巻高等学校鰐陵同窓会



特別寄稿

詩と考古学のワラジを履いて

三宅宗議（26回生）

私は鰐陵賞を二度いただいている。一度目は一年のとき、二度目は卒業のときである。一年のときは団体賞で人文科学部考古学班の一員として、先輩達の功績に私の活動も加えられていた。二度目は個人賞で、文芸部員としての創作活動が対象となった。一九五四（昭和29）年のことである。

鰐陵賞は年度ごとに、生徒会活動で功績のあった生徒に与えられる。だが、文化部の活動には競技記録のような客観的な評価材料がない、だから、一度目も二度目も授賞と聞いたときはピンとこなかった。

それで、私は石高を卒業してからどうしたかというと、大学も職業もそれとは無縁な道を歩んだ。いわゆる専門家にならなかつたのである。

ただ、個人として縁がなかつたわけではない。詩は書いてきたし遺跡の発掘調査もしてきた。しかし、そうしたことは私的にワラジを履くにひとしく、背広とネクタイの会場などに出せるものではない。もちろん履歴書にも書かないし、名刺に刷ってばらまいたりもしない。これは教員をやめて二十年経ったいまでも、習性として身につけている。

ところで、本誌57号に、その〈私〉の文芸と考古学について一文を寄

せることになった。革靴ならぬ二足のワラジを履いた〈私〉のことを書くのである。いささか変則的な自分史であるからには、それなりに一言弁明した方が良いように思われる。

まずもってお断りしたいのは、私はワラジを履いたとき本務・本業を手抜きしたり勝手に変えたりしたことはなかった。ということである。しかし、それは当然のことだから、わざわざ言うこともないだろう。

では、虚業に類する〈私〉の文芸と考古学の自分史は、本誌で話すに値するものなのか。

文芸であるが、石高を出てからも変わらずに青い顔して詩を書く男がいた。そういう変わり者もいて、そいつがマニアックな内面の履歴を公開しようというのである。多少は話題にならないものかなと思う。

考古学であるが、その後も飽きもせず石高生の通学圏を徘徊する男がいた。そういう、地縛霊に取りつかれた卒業生が、あるかなしかの足跡をふりかえり、嗅ぎつけた地域の歴史を伝えようというのである。少しばかり面白いことにならないかなあと思うのである。

I 詩のワラジを履いて

1 石高時代の詩と小説

石高の三年間、私はいわゆる小説を三編発表した。文芸部誌『木犀』に二編、生徒会学芸部誌に一編である。その題名と内容は、三年のときの「軍鶏」を除き忘れてしまった。からだが痒くなるような感覚だけのこっている。

思えば、私の「小説」を読んで下さった石高の先生方は懐が深かった。二年の春だったか、国語の大床常治先生が生徒会新聞「鰐陵」に『木犀』5号の書評を書かれている。その中で三宅の作品は「5号中の拾い物」とあった。ちなみに、この「小説」は文芸部長で二年の阿部功一さん(25回生)の勧めで書いた。彼は女川中学校で同級生だった。石高在学中に書きつづった小説を、卒業のとき一冊にまとめるのを手伝った。

翌年の『木犀』6号に載った「軍鶏」は、国語の浅野正蔵、吉田鉄治といった怖い先生方が褒めてくださり、とくに吉田先生からたくさんの助言をいただいた。美術の杉山寿先生は、「職員会議で全員一致だったよ」と選考経過を教えてくださいました。そうした先生方のお心配りがどんなにありがたかったことか。

ついでに記すと、地元新聞がなぜか『木犀』6号を取りあげた。某記者はその中で「軍鶏」を「高校生とは思えない老成した文章」と評し、「作者は『わたし』とともに悪に陥った」と断じた。

私が詩を書いたのは中学生のときからだが、活字になったのは石高二年のときが初めてである。同級の馬場仁一さん(26



石高3年時の文芸部誌「木犀」6号(表紙)

回生)の勧めで「駅前広場で」という詩を生徒会新聞「鰐陵」に発表した。

夕映えの空の陰の 暗い／駅前広場に沈んで／
わたしは／人夫達と／汚れた 時 をすゝりながら／
ひ弱い プラタナスの／
死 をみた／

…… 「駅前広場で」

書き出しの部分である。プラタナスの死とは、石巻駅前にあったプラタナスの木が伐採されたことを指す。行く人はそれを惜しんだが、その人たちを「わたし」は「嘘に腐った涙を落とす」と咎めた。そして、プラタナスの死を「哀しいとは思わない」と言った。プラタナスは人間の利己心で植えられ、伐られた。その死はそのような現実から離れて「何をも越えた透明」になったのだから、それでいいのだと言っている。この「何をも越えた透明」とは何かというところ、意識がなくなることを言った。身体の死がそれに伴う。私はプラタナスにもそれがあつた、そういう無意識の世界は客観的にも存在すると信じていたようである。その是非はさておき、詩人だった社会の菊地正先生が「うまいなあ」と言ってくださった、そのことは終生忘れられない。

三年のときは「逝く夏の陽に」という詩を発表したが、そこでは太陽の「燃える口づけ」による「白い思索」が「永遠の一切」であると言っていた。「軍鶏」では闘鶏に熱中するとき、恍惚の中でそれが実現すると書いていた。ちなみに「軍鶏」のあらすじは次のようなものである。

主人公の「わたし」は恋人に裏切られ、人間不信と現実否定におちいる。しかし、闘鶏の場面で感じた恍惚感こそ、現実を越えた絶対無の境地だと信じる。一方、現実相対的なものだから無意味だとして、軍鶏泥棒や、傷害事件を起こす。「わたし」は闘鶏のさなか義弟を殴って村人に追われ、山中に逃げる。そして現実から逃げられない自分の滅亡を感じ、死ぬ。事件は四百字詰め原稿用紙九十八枚目で終わった。

ああ誰でもない死のいろの誰か

鐘の彩紋をふわけて昇りくる——水芭蕉の

見知らぬ思惟は誰か

……「水のとびら」

第一連と最後の第五連を抄出したが、この詩では夕方の水たまりに映る影の変相を描こうとしたものである。落下のイメージが水たまりの一点に集中している。思惟という言葉は水芭蕉の姿を指している。この詩でも死がでてくるが、それは現実の基底にあると感じたものである。自分の空っぽの精神を水たまりに転化して虚無と言っていた。それは死とシノニムであったようだ。私はそこから、新しい思惟が生まれることを自分しんに期待したのだと思う。

このころ私は、ヴォーリンガーの『抽象と感情移入』（岩波文庫）を読み、その論旨によって、この具象性を欠く詩のイメージを説明しようとしたが、できなかった。ちなみに、ある詩誌の批評子はこの詩を評して、リアリティーがないとか空海の言葉遊びの真似だとか言った。私は笑ってしまった。

3 美の即物性を目ざす

その後の私の詩はどのように変化したのか。座右には西脇順三郎の初期詩集『あむばるわりあ』と村野四郎の『体操詩集』があった。とくに『体操詩集』は、叙情性を削いだ言語で競技を描き、その動態の美と一種の思想を表現している。新即物主義（イデオロギカル・リアリズム）といわれる詩法である。私はリルケの絶妙な語法による『新詩集』をその良きモデルだと考えた。この詩人が愛した薔薇は、内からひらき出る幾重もの美によって存在している。私も事物の本質を、それが現す美の相において描きたいと思った。

あなたが愛の手の影を

この白い化石のうえにたらすなら

魚族はしびれ

水藻のような韻律を身ごもることだろう

そしてあなたが

鎧よろいうつ手で〈生きよ〉と問うならば

石の魚族は

むずかゆく死の骨脈をひびわれてきて

真紅の鱗うろこを豎琴リットの音のようにひるがえす

……「朝」

石化した魚族は、愛の手を差しのべ励ますならば、生命を得て泳ぎ出すだろう。

六〇年だったか、知友にあてた賀状の文面である。大きく「朝」と朱書きした賀状にふさわしくない文言を使っている。石化した魚族とは虚無の中の死を意味し、新しい思惟の誕生を予感させる。魚族の生命は愛の手によって中から生まれ真紅のヒレをひるがえすだろう。

この詩はすなおに書けたが、これまでは鬱屈した内面の経過があった。私は上京してから不如意なことがつづき、慢性的に落ち込んでいた。精神の落ちる先は自分の内奥にある空洞。それを私は虚無と言ってきたのだが、「朝」の詩を書いたとき、そういう状況から解放されそうに感じたのである。それにしても「愛の手」が必要だったとは？

この詩は、先の二冊のアンソロジーが出たあとに書いている。私は大出を出、フトしたきっかけて生活協同組合運動に入っていた。いらい約十年、おもに大学生協において経営の安定と協同意識の普及に努めた。学生など多くの人と接して時事や経済を学んだことは幸いだつた。これからだと思っていた矢先、胸部疾患が再発し、東京都立大学生協を依願退職した。すべての消費者運動から身を引き、郷里へ帰ることになる。

◆ 一九六五（昭和40）年、私は宮城県の教員となった。担当科目は国語である。矢本高校定時制を振り出しに、石巻工業高校、古川工業高校全日制・定時制、石巻高校定時制に勤務し、九五年に定年退職した。

かすかに

音楽のわたるのが聞こえる

見れば空高く 彩雲が細くなされる

この日 候鳥がリボンのように墜ちて死んだ

空はいま

痛ましい記憶をたどっているのかも知れぬ

かの鳥のかるやかな飛翔に沿って

…… 「レクイエム」

彩り美しい雲が空を行く。その雲に音楽を聞いた。あれは空が、飛ぶ鳥の死を悼んで奏でているのだろう。

この詩では、かるやかな季節の鳥が落ちたと書いている。落ちた鳥は喪章でもあった。

この詩は教師生活二年目に発表したものだが（矢本高等学校生徒会誌『学蜂』）、落魄の思いはしばらく消えなかった。

私は詩誌や詩集のたぐいを読まなくなった。現代詩の動向に目をつむることは損だと思ったが、気が向かなかつたのである。それは定年退職まで三十年つづいた。

ただ、各社の国語教科書の詩は良く読んだ。掲載作品や指導書の中に疑問とするものがあれば指摘し、改訂版で差し替えてもらったこともある。もう一つの例外は受贈した詩集である。中でも北海道の詩人山本丞さんは、五七年から四十三年間に十二冊の詩集を出している。受贈のつど感想を書いた。そういえば、氏の第一詩集『生と死と愛と』の表紙はあのイラストレーター山藤章二氏につくってもらったものである。

4 「奥の海」に注目する

石高定時代に転動して、市史『石巻の歴史』の編さんにかかわった。私は編さん委員兼主任編集委員の一人として、日中は編さん室にかよった。八六（平成元）年に第四巻教育・文化編が発行され、私も文化編の文芸史と宗教編の一部を執筆した。地元の人たちの文芸史は近世に始ま

り、俳諧と漢詩に見るべきものがあつた。しかし、近・現代の地元詩人の詩はどうかというところ「寥々たるものがある」と私は思った。短詩形文学としては未発達なまま推移したと考えたのである。そのころ石巻には蒼海同人社があつて、及川文弥さんたちが『蒼海』に小説などを発表していた。私も詩を書いていたが、それこそ寥々たるものであつた。

また、『石巻の歴史』の文芸史の中で、新古今集など中世和歌集に見える「奥の海」は、石巻の海であると述べた。これは前年「おくのうみ考」と題して発表していたものである（宮城県高等学校教育研究会国語部会『研究集録』36号）。その概要は次のようなものである。

奥の海とは「陸奥の奥なる奥の海」で、律令古代から陸奥国府多賀城の奥とされる海道地方の海を指す。その海は都人から、蝦夷と接する国境の海とされ、「みやび」の美の極限にある海と観念された。

この奥の海が石巻の海であることは、地理的にも歴史的にも否定できない。安永度の「風土記御用書出」などにはその証拠がある。

参考までに、根岸村などの「名所」に記された和歌の例をあげる。

たづね見るつらき心の奥の海よ潮干のかたのいふかひもなし
定家

憂しとても身をばいづくに奥の海の鵜のゐる岩の浪もかくらん
順徳院

この奥の海は石巻の海について、歴史学者はどう見たであろうか。

『石巻の歴史』第一巻では肯定的に引用されていた。古代史の平川南（国立歴史民俗博物館教授）、中世史の入間田宣夫（東北大学教授）、近世史の渡辺信夫（東北大学教授）の諸氏である（肩書は当時）。その中で、平川さんの和名類聚抄郡郷部の研究に基づく所論は、私説のあたらしい論拠となった。

その後この説は「石巻かほく」で再論し（私と石巻①～④）二〇〇五

年二月)、「東京鰐陵」十号でも「万石浦と奥の海」と題して少し補足して述べた(二〇〇七年一月)。論文としては未完である。

では、奥の海はだれによって、いつ万石浦に改称されたのか。

変えた人物は仙台藩主伊達忠宗、変えた日は一六四九(慶安2)年八月二十七日。この日としたのは近世史の阿部和夫さん(29回生)の教示があつたからで、『伊達治家記録』によって確かめた。

しかし、「奥の海」は歌枕、名所であるから、国文学とりわけ中世和歌史の研究者の所見を聞きたいところである。そもそも中世の宮廷歌人たちがイメージした「みやびな奥の海」は、「蝦夷地」に塗り込めた異界のイメージとは異なる。そういう視点に立った「奥の海」論があるのかどうか知りたい。管見のかぎりでは、私見の是非に言及した歌枕辞典や論者はまだ目にしていない。



雲の波八重たつ方のおくの海の今あらはるるあさなぎの雲
(冷泉為尹)

——万石浦はむかし奥の海と言われた(写真撮影・構成 三宅哲(27回生))

ちなみに、海保嶺夫氏の『中世蝦夷史料』(八三年刊)では「奥の海」は除かれている。翌々年刊の『近世蝦夷地域域成立史の研究』でも同様である。

ところで、新古今集の和歌は、定家や順徳院の和歌にも見られるように、絶妙な言語操作によって描かれた日本画であると思う。私はその和歌の内包する高質の絵画性に驚き、自分を省みた。自分は言葉で絵画

を描こうとしたが、それは新しい試みではなかったのである。次の詩はそれに気づかず書いた(月刊「ひたかみ」所載)。

石像の破片を拾う

欠け過ぎていたので思い出される アポロでなく
墜ちた少年の頬の白さが

空あおぐ塔の窓々は憶えていない

ただ 庭に薔薇が咲いている 鮮やかに
かの痛ましい印象を抱き込むように

石像の破片をそこに置けば

節理の縁に昏れてる眼差し 哀しくも
熱さない(時)の遙かなるミュトスよ

ひとしきり濡らして行くは唇の群れ

かすかにもあおく頬ははにかむ そして
臥像の震えつつ立つ気配 アポロでなく

……「ミュトス」

拾った石像の破片によって、墜死した少年をいとおしんだ。少年の死の現場にその面影はなく、バラの花垣があるだけである。その中に石像の破片を置くと、とおい神話のまなざしのようなものが感じられる。それは通り雨に優しくうたれ、少年の姿が復活しそうに思われたのだが……。追悼の詩であるが、少年が墜死した理由も過去も語らず、「遙かなるミュトス(Mythos)」と神話風にぼかしている。少年の白い頬に血の色を薔薇を配したり濡れた頬を「あお」くするなど、色彩的にも工夫している。「アポロでなく」という言い方は、読者に一瞬その彫像を想起させ、その残映の中に少年の像を彷彿させようという方法である。

この詩は、中学生の自殺事件にヒントを得たものだが、内心忸怩たる

ものがある。私は教員時代、教育や社会の問題に真面目に対峙したつもりである。だが、それは職務にとどまり、詩の主題として取りあげたことはなかった。理由は「石巻かほく」にも書いたとおり、現実に切り込んで語る批評的理想的な詩が書けなかったのである（「私と石巻⑥」二〇〇五年二月二十日号）。私は詩の中で、日常的な事象をナマな形で表現することを避けてきた。非具象の表現法にこだわっていたからだが、どんな感情も思想も無をめぐる弁証に過ぎないとする考えが、まだどこかにひそんでいたのかも知れない。

5 日常の社会を見る

一九八〇年代、私の詩に変化が生じた。絵画的イメージを重視する一方で、耳で聴いても美しく感じる言葉で詩を書きたいと思ったのである。これは日本語の響きや韻律を意識的に取り入れることであり、これまで排除してきた音楽性を組み込むことである。しかし、それだけでは納まらず、詩に曲を付けるまでになった。歌の創作である。

実際のところ、作曲を始めたきっかけはそんな殊勝なものではなかった。古工定時制に通う道で、急にアタマの中で音楽が鳴り出した。それを譜に書き、言葉が付けたのが始まりである。石高定時制に移ってから「ご当地ソング」を連作した。どこかしっくりしないと感じながら。

角を曲がれば並木路／あおい銀杏がささやいてるよ／

あの日愛したあのひとの／思い出ゆれてる街よ／

ああ 恋しいその名呼べば／見知らぬ人のふりかえる／

今は悲しい夢の街よ／海の風ふく広小路

……………「夢の街」

石巻の旧市役所通りと北上川右岸の間にある広い横町通りを広小路という。ちなみに、この歌詞の二番は「路の向こうに船着場／白い汽船が招いているよ／あの日別れたあのひとの／面影ゆれてる街よ」。そしてせつない思いに駆られ、幻想の中へ駆けて行く……。

しかし、その風景も「3・11」の大地震大津波で消えてしまった。

この歌詞は譜面なしで、石高26回生の還暦記念誌『われら熟年』に載せたものだが、広小路の不思議な情緒が書けていない。それどころか、この歌詞は詩というには月並みすぎる。非叙情的なモダニズムの詩を目標としてきたのに、郷里をうたうと自分の体質をさらけ出す。メロデーも感傷的である。これも体質なのだろうか？

石巻から転出するとき、この種の歌二十曲ばかりを破って捨てた。あとで歌詞だけを「SONG」としてまとめたが、封印した。

九七年五月、埼玉県越谷市に移住した。二〇〇〇年ごろから市民活動に参加するようになった。いまは「元荒川の自然を守る会」だけである。元荒川の景観を詩に書き、小詩集『元荒川』として役員に配った。

〇七年、有志とワーカーズ・コレクティブを立ちあげ、市の農産物直売所に拠って地産地消運動を始めた。しかし二〇一三年、入院がつづいたので運動から身を引いた。

首都圏には詩人があつちこつちにいる。また、詩人たちと接する機会もある。私は読者として振る舞い、贈られた詩集には批評を書いて返礼とした。思うところあり、「九条の会詩人の輪」の一員となった。

夢のあと 夢に見た喫茶店に行けば

むかしのままの窓 壁と椅子

二人で壁にイニシャルを書いたっけ

けれどあの日 あなたは急に立ち

「さようなら」と言って去って行った

ほっそりとした姿 目に涙を浮かべて

それから 風が伝えてきたことは

思いもよらぬ悲しい知らせ あなたは

被曝したヒロシマの母の児であった

壁にのこるあなたのイニシャルは

ギリシャ文字の終わりのΩ^{オメガ}

「気に入っているの」と笑ったっけ

ひとり その日を感じていたあなた

不安と希望の間で苦しんでいたあなた

気がつかなかった愚かなわたし

……………「イニシャル」

仮に「わたし」のイニシャルをMとしよう。彼女は自分のそれをΩと書いた。オメガというその文字の字形は、彼女にとって原爆を表し、自分の運命を象徴する。彼女は胎内被曝に起因する病気に悩み、苦しんでいた。けれども、切実なその思いに「わたし」は気づかず、彼女は絶望して別れを告げる。そして……。

この詩は痛むところで素直に書けた。そのころ、私は世相の乱れや政治の歪みに敏感になっていた。戦争、被曝、医療事故、過労、失業、差別、老齢、年金などで苦しむ人たちを身ぢかに見た。その人たちの生活の声を「ねんきん越谷」に載せた。〇六年、その一部を私家版の詩集『七十歳のエチュード』にまとめた。

石高勤務時代にもどるが、八七年、私は「詩をどのように書いたか」という反省文を書いている。「事実としての物事象を直視し、それに則して、生きた感動や思想を投げ入れた作品世界を構築すべきではないのか」(宮城県高等学校教育研究会国語部会『研究集録』第28号)。この歳にやっとその課題に向き合ったのである。だがまだ逡巡している。私を呪縛する非具象の美の意識が「これで良いのか?」と問うのだ。

一方、私はそれと直結しない歌詞も書いていた。和讃や如来唄(梵唄)などの仏教音楽に興味をもち、御詠歌を濫作していたのである。

6 歌の原点から詩を

二〇〇八年、越谷でNPO現代座が演劇「約束の水」を公演した。劇中歌を聞いた私は、作曲家の岡田京子さんを東京・小金井の現代座に訪ねた。それらしい岡田さん主催の「めだか大学」にかよって六年になる。

岡田さんは「誰でもみんな音の種を持っている」という。その種を自分の中に見つけ出し、母語である日本語の抑揚や旋法を生かして歌にしようというのだ。日本語の歌はもともと五音音階でうたわれた。その音階は日本人の心性に潜むものだが忘れられている。そういう歌をつくってうたうということだ。かつての私のソングへの厳しい批判でもある。

岡田さんのこの考えの根底には、今日に至る欧米一辺倒の音楽教育や音楽市場に対する憂慮がある。根本にあるのは音楽学者小泉文夫氏の考え、作曲家清瀬保二氏の作品である。だから、五音音階の歌は復古主義でも民族主義でもなく、国粹主義とも無縁であることがわかる。

二〇一四年、私が五音音階の歌をつくり始めてから六年目である。宮澤賢治の「春と修羅」の詩句による「ひばり」が最初で、「鳥のあしあと」などの鳥シリーズ、「花みずき」などの花シリーズ、「とぜんだな」などの方言・民話シリーズなど数は増えた。ただ、「生活や本音が出ていない」と注文をつけられたりしている。その中で、なぜか「わたしの女川」が三宅らしい歌だといわれている。

市場にただようサンマの煙

ウニ ホヤ ササカマ 店先で見つけた

想うは女川 海辺のふるさと

青い波 ウミネコ 働くひとたち

女川ことばで 店の人呼んだら

女川ことばで 中からこたえた

涙で話した 地震と津波

II 考古学のワラジを履いて

1 石高生の考古学

一九五一（昭和26）年四月、私は人文科学部に入学しようと思った。部室をのぞいたら先輩らしい人が二人いる。「あのう……」と言いかけたら「よく来た。ここだ」と言われ、ものわがりの良い人たちだと思った。聞かれるままに名前を言つて歸つた。

その週の土曜日、言われたとおり長靴を履いて図書館前に並んだ。新入生もいたと思う。菊地新一さん（26回生）は覚えているが、ほかの人は思い出せない。

先輩の後ろについて内海橋をわたつた。湊の洞窟に行き、大門崎の砂丘を見て根岸の溜め池まで行つた。誰かがカメの破片と貝殻を拾い、「これはジョーモンドキだ。ここはカイヅカだ」と教えてくれた。それで初めて、申し込んだ相手を間違えたと気づいた。

人文科学部には弁論班、経済班、考古学班がある。私は経済班に入つたつもりだが、考古学班だったのである。あの二人の先輩は、三年の阿部敏郎さん（24回生 のち木村姓）と石野博信さん（同）だった。帰り道、二人と話をしているうちに、班を間違えたと言いくくなつた。

考古学班は人数が多く、部室には誰かが常にいたように思う。経済班や弁論班の人も時々見かけたように思う。考古学班の二人の先輩は、いつも一緒に行動しているようだった。噂によれば、美術の時間に抜け出して渡波町の屋敷浜貝塚に行き、掘つた土器を美術準備室に運んでいるという。準備室の先生は考古学班顧問の杉山寿先生だった。

◆
考古学班がその年どんな活動をしたか記憶にない。ただ、夏休みの合宿だけは覚えている。初日は橋の近くからボートを漕いで万石浦をわたる。屋敷浜で降りて谷あいにテントを張つた。そこをベースにして、朝、海の見える台地に登り、貝塚を掘るのである。私たちは厚い貝層を

突つついて遺物を探した。私は骨角器らしいものを一個掘り当てた。ミーティングは食事の時。炊事は当番制である。隣の大浜に偉い代議士の実家があつて、差し入れをもらいに行つたことがある。

発掘は一週間ぐらいつづけたように思う。面白かつた。しかし、私は知らずにいたのだが、いまにして思えばこの発掘は文化財保護法違反の疑いがある。

余談になるが、この調査には石巻女子高の社会科学部員も参加した。彼女たちは毎日、阿部先輩と石野先輩が漕ぐ舟で送り迎えされ、ボクたち下級生は眩しくそれを眺めた。ただ、許せないことがあつた。彼女たちは発掘をしているとき、そこいらの石を拾つてきては「先生、これ石器でしょうか」と二人に聞くのである。先生がまた優しく教授するものだから歯が浮く。しかし、二人は高校生としては超弩級の考古学通と聞いていたから、どうしようもなかつた。

◆
人文科学部考古学班はその年度の終わりに、鰐陵団体賞を受賞した。三年生は部の創設に当たつて考古学班を立ちあげた功労者である。万石浦沿岸をよく調べていて、屋敷浜貝塚などを発見し、調査をつづけた。ガリ版刷りの部報『究古』でその成果を見たように思う。遺物は鰐陵文化祭などで公開していた。鰐陵賞は当然のことだと思ふ。

ところで、本稿の冒頭で、この受賞には私も関係すると述べた。一年生のくせに生意気だと言われそうだが、賞状の文言には私が独自調査した遺跡のことも書かれているのである。

実はこの年度の秋から冬まで、私は自分の住む女川町を歩いて遺跡を探した。十力所はあつたと思う。貝塚はないか、あつても小規模なものである。しかし、町内の実態はほとんど知られていなかった。拾つた遺物はそのつど美術準備室に持つて行き、杉山先生に教えていただいた。

女川町の遺跡で記憶に残るのは鷲神の内山遺跡である。大きな遺跡で、畑に散らばる縄文土器や石鏃、石匙、石斧などをたくさん拾い集め、例によつて美術準備室に運んだ。それから何日か経つたある日、不

思議なことが起こった。河北新報に内山遺跡が発見されたという記事が出たのである。発見者は石高生とあり、私の名前まで出ている。驚いて杉山先生のところに行き、どこから新聞に伝わったのか尋ねた。知らないということだった。

この内山遺跡は二〇一四年、女川町教育委員会によって発掘調査された。区画整理にともなう行政発掘である。震災復興事業であり止むを得ないことだが、調査が終わり遺跡は破壊された。女川町の重要遺跡が消滅した。私の青春を想起させる物証もなくなった。

この発掘のニュースは、中学時代からの同級生木村國雄さん（26回生）が、河北新報の記事の切り抜きを添えて教えてくれた。避難先の大崎市古川からである。詳細は『平成二十六年宮城県遺跡調査成果発表会』（宮城県考古学会）の発表要旨で知った。

一年生のときの話をもう一つ。女川町浦宿にある尾田峰貝塚は縄文後期から晩期の大貝塚である。父が発見して「発掘」した。私も共犯者だったが、たくさんの土器破片をセメダインでつなぎ、石膏で復原して鰐陵文化祭で展示した。この貝塚の周囲には集落遺跡があるはずである。新たに貝塚も発見されている。だが、きびしい環境にある。

考古学班の班長は、初年度が阿部敏郎さん、翌五二年度が吉野敏さん（25回生）、五三年度が私である。五二、三年度の活動は同じようなもので、石巻地方の遺跡を巡検し、夏は合宿調査、秋は文化祭で遺跡の紹介と遺物展示をするというものだった。ここでは省略し、五三年夏におこなった合宿のことをちょっと書くだけにする。

合宿は人文科学部顧問の本間荒一郎先生と計画を練り、牡鹿半島で実施した。何人参加したか忘れたが、黒崎農場に集合し、翌日は本間先生の古文書調査に従って大原村へ移動。その日から大原小学校に泊まって給分浜貝塚を発掘した。発掘には日本考古学協会会員の小野力先生（宮城県工業高校教諭）が指導に来られた。

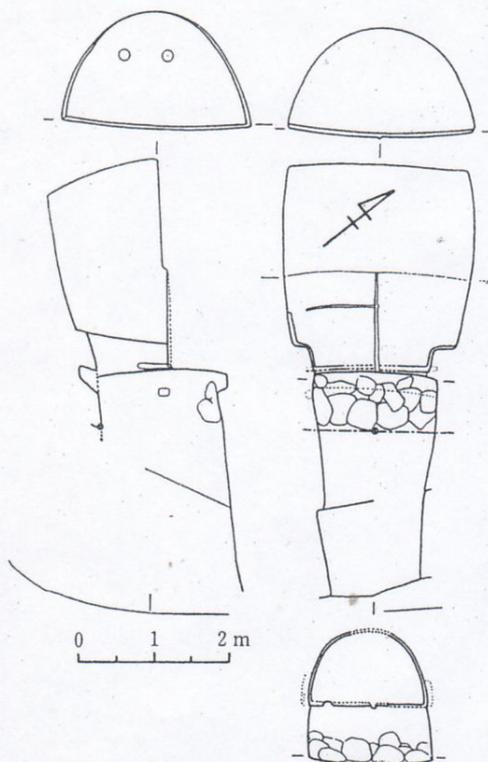
給分浜貝塚には、県道を挟んで縄文前期と中期の貝層がある。トレンチを入れ、貝層の層位を区分して遺物を採集した。最終日に私の側で見ている小野先生がオツと声あげ、薄い表土層から土器片を抜き取った。「崎山式だよ、これ」。弥生時代前期の土器で、松島湾沿岸で最近発見されたばかりの型式だと教わった。石巻地方でも最初の発見である。稲作が始まっていたのかと胸が踊った。

この年度の調査報告はガリ版刷りの部誌『究古』6号に収め、新聞「鰐陵」の卒業記念号でも概要を報告した。

2 矢本横穴墓群を掘る

私は五三年に石高を出て上京し、六五年に石巻にもどるまで、考古学とは縁がなかった。ただ、六〇年発行の『女川町誌』の一部を執筆している。高校一年のときつくった遺跡一覧表が役立った。

六六年、実験考古学の楠本政助さんと一緒に石巻古代文化研究会を立ち上げた。石巻地方の考古学的研究が目的である。翌年、楠本さんと兄の樋口隆信（23回生）と私の三人で、図録『尾田峰貝塚出土遺物』を編集・出版した。私は解説版「尾田峰の縄文文化」を同会から出版した。



矢本横穴墓群28号横穴墓実測図
（『矢本町史』第1巻より）

六八年、かねて注目していた矢本町（東松島市）の矢本横穴墓群を発掘し、翌六九年第二次調査をおこなった。ともに石巻古代文化研究会による学術調査で、矢本町教育委員会の全面的な協力をいただいた。

この調査は横穴墓研究の第一人者・氏家典先生（宮城二女高教諭当時）が指揮し、蝦夷研究の権威・高橋富雄先生（東北大学教授当時）は別格として、藤沼邦彦さん（33回生）のち弘前大学教授をはじめ、大学院生や大学生、石巻市内の高校、小学校の先生が参加した。記憶にのこっているのは、高橋先生が足場の悪い現場でスコップをふるい、周りをハラハラさせたことである。

発掘した横穴墓は右から13号、12号、26号、27号、28号、29号、30号の七基である。出土遺物が豊富だけでなく、歴史的に重要な発見があった（三宅『矢本横穴古墳群 第1次調査概報』『同第2次調査概報』矢本町教委・石巻古代文化研究会刊）。一例をあげると、29号横穴墓の女門前から「大舎人」と墨書した土器が出土したことである。八世紀の須恵器の杯で、これは石巻地方どころか東北地方古代史の常識では「あり得ない」発見だった。

私はこの発掘の後、横穴墓の被葬者の居住地を求めて、矢本町内の小松や赤井の微高地を歩いた。そこに大きな古代集落の遺跡があることは、伊東信雄先生（東北大学教授 当時）や伊藤玄三さん（のちに法政大学教授）の踏査によって知られている。とくに赤井には星場囲や御下囲を中心に八世紀の土器が多数散布しているが、その中に高台の付いた須恵器の杯があり、底に「舎人」とへら書きしてある。あったのだ。また、同じ時期の平瓦片も散布している。ここはただの集落遺跡ではないと直観した。牡鹿柵跡ではないか？ 私は、地割りや土塁状の高まりに注目して城柵官衙の痕跡を探した。そして、そのことを踏まえて、石巻地方の古代史を再構成しようと考え、次のレポートを書いた。

七〇年、「奈良時代の牡鹿郡に関する予察―牡鹿柵と郡域をめぐって」

（『宮城県石巻工業高等学校研究集録』第一集）

七二年、「宮城県石巻地方における律令古代の問題点（同第三集）。

七三年、「矢本町赤井星場出土のへら書き土器」（『石巻地方の歴史と民俗』石巻工業高校図書館編）。

ちなみに、七一年発行の同校『研究集録』第二集に「宮城県猪落出土の石器について」と題して女川町猪落の石器について書いている。この石器は『女川町誌』に「ハンドアックス状石器」と報告していたもので、のちに芹沢長介先生（東北大学助教 当時）も旧石器と判定された（楠本政助「先史」『矢本町史』第一巻四十九ページ）。ただし、この石器はその後、出土層不明という理由で一般に旧石器とは認められていない。

3 古代史の常識を疑う

七三年、『矢本町史』第一巻が刊行された。この巻は編成も内容も型破りの自治体史であつたと思う。歴史分野の執筆は「先史」が楠本政助さん、「古代」が三宅、「中世」が佐藤雄一さんである。B5版で総ページは四百七十九ページ、そのうち二百十九ページを「先史」が占めている。そこに集められた楠本さんの骨角製漁具の研究は、考古学界に大きな衝撃を与えた。朝日新聞がスクープし、「現代の縄文人」の誕生を社会面で大きく伝えた。マスコミ各社も競って報じた。

佐藤雄一さんは、中世の石製の率都婆である板碑を拓本とスケッチによって紹介し、深谷保の領主長江氏との関係を明確に指摘した。

私は私で、奈良時代の石巻桃生牡鹿地方（石巻地方）の中心は矢本で、律令国家の体制がすでに浸透していたなどと書いた。これまでの常識とはまったく異なる見解である。

◆ これまでの常識というのは、次のようなことである。

第一に、奈良時代の大崎地方や石巻地方は、蝦夷が支配する地域であるとされていた。奈良の国家はその地域を支配下に置くため、多賀城に鎮守府を置き、玉造柵や牡鹿柵などの前進基地をつくった。柵には東国農民を柵戸として投入し、新田開発に当たさせた。というものである。

柵戸とは何かというと、明治政府が北海道の開拓に投入した屯田兵と

同じで、現地住民のアイヌが反抗したら武器をもって戦う性格のものである。私はそのように教わっていた。

牡鹿柵の所在地については、丘陵説がいくつかあったが、石巻の日和山が有力とされていた。丘陵周辺には柵戸集落があったはずだという。

しかし七〇年代に入り、多賀城跡の発掘調査が進むと、多賀城は役所の建物で構成され、土塁と見たのは築地塀であることが分かった。これは諸国の国衙建物と同じで、軍事的な城柵とは言えない。

そうすると、大崎地方や石巻地方に設置された諸柵はどういうことになるのか。「郡治」とする解釈も発表された（工藤雅樹「多賀城の起源とその性格」『古代の日本』8東北）地方行政施設である。

これを石巻地方に則していえば、牡鹿柵も「郡治」の施設。それなら丘陵になくてもよいことになる。実際、日和山をふくむ鰐山丘陵を歩いてみたが、それらしい遺構や遺物は見られなかった。河南町の須江山、河北町の沢田山などの丘陵や山地を歩いても同じだった。

それで見直したのが、多賀城創建期の瓦が出た鳴瀬野野藪岡遺跡と、平安時代の墨書土器が出た石巻山下の清水尻遺跡である。しかし、最も有力な候補地は旧江合川流域の微高地だった。奈良時代の平瓦や須恵器などが濃厚に散布する北赤井である。私は定川新川の西側の、星場遺跡を中心とする地域を牡鹿柵跡と推定した。そこはのちに「赤井遺跡」と改称される。

次に、常識とされていたのは、奈良時代の石巻地方は国家と蝦夷が対立抗争を繰り返す地域だということである。

しかし、それは間違いで、国家の律令制が深く浸透していた。と私は書いた。その証拠としてあげたのは、矢本横穴墓群から出た「大舎人」の墨書土器と、赤井遺跡から出た「舎人」のへら書き土器である。

これらの土器は八世紀前半代のものだから、「大舎人」も「舎人」も大宝令か養老令のトネリ任用規定によって任官した律令官人である。トネリは天皇、皇族に近侍したり各省の雑務に供奉したりする。そうし

大舎人

矢本横穴墓群 29号墓
玄門前出土土器の墨書銘
(実大、書き取り/三宅)

た人物たちが赤井の集落や横穴墓にかかわっていたのである。ところで、トネリに任用される人物は家柄が良くなければならない。父または

祖父の位階が五位以上（養老軍防令）か、父が六位以下八位以上であること（内六位条）が条件である。

しかし、父や祖父が内位の官人であるなら、外国の陸奥国にはいないはずである。土器の「大舎人」銘「舎人」銘についての私の解釈に無理があるのではないか。そのような批判があった。ただ、のちの牡鹿氏（道嶋氏）のように、地方出身でも平城京で任官して叙位され、その子・孫がトネリになることはあり得よう。その人物が本貫地の牡鹿郡に帰還して経歴を誇ったことも考えられるだろう。

そうした人物は牡鹿郡に帰って郡司層を構成するはずである。だから、「大舎人」「舎人」のいた矢本の地にはすでに牡鹿郡が成立していて、加美郷、碧河郷といった律令村落も存在していたと考える。条里制も施行されていた。この地方は蝦夷が支配するような状況ではないのである。ちなみに、牡鹿郡出身の道嶋宿禰島足は、正四位近衛中将まで登った。奈良時代の橘奈良麻呂の乱、藤原仲麻呂の乱などで武勲をあげ、称徳女皇の信任が厚かった。この人物は赤井遺跡出身である——と私は書いたが、これには読者も驚いたことだろう。

『矢本町史』第一巻古代では、おおよそそのようなことを書いた。その中で研究者が注目したのは牡鹿柵跡の所在地の問題である。これについては、七〇年に「奈良時代の牡鹿郡に関する予察」を発表した時から論議されていた。賛否両論がある中で肯定意見を寄せられたおもな方々

は、考古学の伊東信雄（東北大学教授 当時）、古代史の高橋富雄（東北大学教授 当時）、同じく板橋源（岩手大学教授 当時）、歴史地理学の木下良（國學院大學教授 当時）の諸先生である。高橋先生は著書の増刷版で肯定され、板橋先生は『國史大辭典』の「牡鹿柵」の項で「有力な説」と記述されている。そうしたこともあってか、いくつかの歴史辞典に私の説が載るようになった。

ただ、私の説はこれで終わったわけではない。赤井遺跡説を否定する研究者は、そこを牡鹿柵とするだけの遺構上の確証がないと主張していた。それは当然のことで、私は自説を考古学的に証明するために発掘調査をしなければならぬ。しかし、そのための準備はまったくできていなかったのである。

4 考古学に一步踏み込む

石巻工業高校に在職中、私は県教委文化財保護課から文化庁の発掘技術者研修会に参加しないかと勧められた。全額県費負担というので、私は単純に喜んで奈良へ行った。箸墓古墳のそばの宿舎に泊まり、夏の四十日間、そこから奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部にかよった。研修内容は各種の測量法、発掘技術、遺構・遺物の写真撮影と実測図作成といった技術の習得である。著名な学者による日本古代史、寺院建築、文化財行政などの講義も聞き、平城宮跡や若草山の前方後円墳などで実習に励んだ。

また、毎週日曜日には研究所員の案内で、平城宮跡はもとより、藤原宮跡、国衙跡、古墳、薬師寺などの寺院建築、各種遺跡の発掘現場などに立ち入って調べることができた。短期間だが多くの研究者と知り合うことができ、また、このような得がたい経験によって、私の研究テーマが固まった。「律令古代における陸奥海道の考古学的研究」である。

七五年、芹沢長介先生（東北大学教授）の推薦をいただき、日本考古学協会の会員となった。「これだけ（論文が）あれば十分ですよ」と、先生はおっしゃった。それがいまでも耳に残っている。

その後、希望して古川地方の高校へ転動した。古川地方は古墳、横穴墓、寺院、瓦窯、城柵官衙などの古代遺跡が豊富である。とくに古代、山道地方といわれたその地域には、玉造柵、色麻柵などの多賀城関連遺跡があつて、多賀城跡調査研究所による調査研究が進められていた。私はそうした古代遺跡群に惹きつけられたのである。

5 緊急調査を引き受ける

一九七〇年代は日本中が開発ブームにわたった時期である。遺跡破壊が列島各地で発生し、埋蔵文化財行政は難しい対応に迫られていった。宮城県にはまた、東北縦貫自動車道や東北新幹線の予定ルートにかかる遺跡が多数あつた。

そうした遺跡の状況に対処する部局は、県市町村教育委員会の埋蔵文化財係である。しかし人員不足で、考古学の仲間たちは現場で悪戦苦闘していた。当然のように、私にも某市教育委員会に出向せよという「命令」が出た。古川工高に転勤して間もなくのことである。

しかし、私は「できません」と固辞した。忙しすぎて体調を崩す人たちを私は見ている。同じ部局に入つて無理をしたら、脆弱な私の身体がもたないことは分かつていた。結局、学校にとどまることになったが、人事を拒否するという態度が関係筋の心証を害したことは否めない。

ただ、そういう私にしても、埋蔵文化財の破壊という現状を傍観していたわけではない。依頼があれば、短期間の発掘なら引き受けざるを得まいと覚悟していた。実際そのとおりになり、春と夏の学校の休業中は調査を引き受けることになった。

調査した市町村は二市六町である。石巻地方では石巻市。大崎地方では古川市、志田郡三本木町、遠田郡田尻町、栗原郡築館町、同瀬峰町、同高清水町。仙塩地方では宮城郡七ヶ浜町。これとは別に、岩手県藤沢町から学術目的の調査依頼が二件あつた。遺跡の数は十力所を越えたと
思う。

大崎地方の遺跡調査は古川工高在職中に実施したものである。

発掘は通常、担当者（調査主任）を中心に調査員、調査補助員、作業員の体制でおこなう。担当者は調査員の確保で苦勞するが、私が担当する調査のときは、古川工高機械科教諭鶴田勝彦さんと同科実習助手桜井幸喜さんが、その不足を補った。鶴田さんは製鉄史が専門なので遺跡出土の鉄製品の科学的分析も併せてお願いできた。桜井さんは同校郷土研究部の顧問でもあり、生徒が調査補助員として参加したときはその指導もお願いできた。三人で調査報告書を書くこともある。地質の記述は地学の同僚が応援してくれ、地形測量には同校土木科の協力をいただいた。また、日本考古学協会会員の佐藤信行さんなど大崎地方をフィールドとする在野の研究者の協力をいただくことができた。そういうことで、私の調査はほぼ自前の体制で実施できたことと感謝している。

緊急調査した遺跡は調査が済むと破壊される。忍びないものがあった。その中には私の研究課題に沿う遺跡もあった。田尻町の木戸瓦窯跡は、陸奥国府多賀城の創建時期の屋根瓦を焼いた窯跡である。石巻地方でも多賀城跡の創建瓦を出土する鳴瀬町野蒜岡遺跡があるから、その窯体の構造を知るために木戸瓦窯跡の実態調査は欠かせない。三本木町の混内山横穴墓群や古川市の小野古墳群小高支群の横穴墓などは、矢本横穴墓群と比較するうえで調査したかった遺跡である。そうした遺跡の中には調査後、そのまま保存が決まった遺跡もあった。

6 五松山の洞窟を掘る

石巻地方で実施した緊急調査は石巻市だけである。遺跡数は少なく、調査規模も小さかった。その中で比較的長期にわたって調査した遺跡が湊字町の通称五松山にある五松山洞窟遺跡である。

この遺跡は採石工事中に見えられた。洞窟の崖面を削ったら、小さな洞窟があって、入口をふさぐ土砂と一緒に土器と大刀の柄頭と人骨が出た。石巻市では初めて見る遺物であり、内部に多数の人骨がある。これを重視した市教育委員会は独自に調査をおこなうことにした。



五松山洞窟遺跡平面実測図（一部）
（『五松山洞窟遺跡』より）

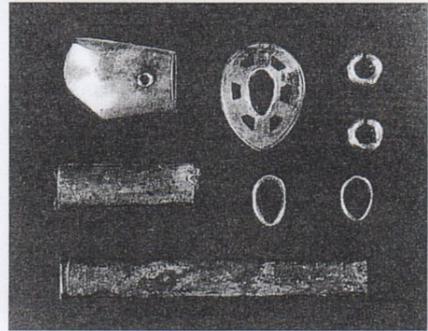
第一次調査は八二年十月二十六日より十一月七日まで。しかし調査未了のため、第二次調査を同年十一月二十一日より十二月三十日まで実施した。この期間、発掘の状況は報道各社をとおして市民に報告した。調査は大過なく終わった。三十日の夜、「ああ、終わった」と腰をあげ、投光器の光で腕時計を見たら十一時四十分だった。

こんなに面白い調査はなかった。嬉しいことに、遺跡は永久保存されることになった。すべて関係機関の理解と熱意、事業者奥津組のご理解によるものである。古川工業高校の配慮もありがたかった。

調査のあと、大学生の茂木好光さん（50回生 現佐沼高校教頭）と一緒に資料整理をおこない、執筆上の検討をおこなった。この間、調査指導にあたった石野博信さん（24回生 奈良県立橿原考古学研究所研究部長 当時）は関係文献の収集などで便宜をはかってくださった。報告書は八八年、『五松山洞窟遺跡—発掘調査報告—』（石巻市文化財調査報告書第3集）として石巻市教育委員会から発行した。

この報告書は、考古学界に大きな反響を呼んだ。九八年、愛知学院大学で開催された『洞窟遺跡の諸問題』（日本考古学協会）のシンポジウム「日本における洞窟遺跡の構造論的研究」でも報告することになった。では、五松山洞窟遺跡とはどんな遺跡なのか。

湊の五松山のあたりに妙な
わさが立っていた。夜な夜な幽
霊が出るという。青白く透きと
おる衣装を着た、三十歳ぐらい
のゾツとするような美人。そ
の現場は採石工事で壊れたが、
小さな穴がまだ盲腸のようにの
こっていた。高さ二メートル足
らず、面積五平方メートルほど
の空間に大小の角石があり、そ
こには一面に幽霊の脱け殻が散乱している。これは面倒な発掘になると
思うとゾツとした。



五松山洞窟遺跡出土の金銅製品
(石巻市教育委員会蔵)

この遺跡は、弥生時代後期の住居跡に古墳時代の遺構が重なったもの
である。とくに注目されたのは古墳時代の遺構で、天井石の落盤らしい
角石の面に、おびただしい人骨と、金銅装の鞆と鏢、耳環、鉄製の冑、
大刀、刀子などの武器武器の破片が散らばっていた。骨角製の鏃、
弓飾り、装身具、貝製の装身具などもあった。

これらの遺物は関東の大型古墳の副葬品と同じものであった。とくに
横刃板鋌留式衝角付冑といわれる冑は、武蔵や下総の国造クラスの首長
の古墳副葬品に見られるものと同じだった。骨角製品や貝製品は紀伊半
島、三浦半島、房総半島などの洞窟遺跡の出土品と類似するが、種類は



五松山洞窟遺跡の人骨群
(石巻市教育委員会)

五松山の方がはるかに多い。これ
らの遺物は、発掘前に出土した須
恵器の提瓶と金銅製の方頭大刀の
柄頭、六窓の鐔などをみると、六
世紀末から七世紀初頭にかけて副
葬されたものと考えられる。

人骨は埋葬のあと八群にまとめ
て改葬されたと考えられるが、骨

の遺存状態は良かった。洞窟の岩が石灰質粘板岩なので、石灰分を含ん
だ水が壁を伝い、遺骨に染み込んだためである。人骨は老若男女、すべ
て四十歳未満で死亡していた。総数十七体あって、歯がまったくない男性
潜水経験のある女性、十代の女性、幼児などである。そのうち十五体が
関東系、二体が縄文時代人あるいはアイヌに似た特徴をもつという(山
口敏「人骨の人類学的調査」『五松山洞窟遺跡—発掘調査報告—』。改葬
とはいえ、こうした合葬の形態は何を意味しているのだろうか。
後で知ったことだが、石巻市の梨木畑貝塚から出た平安初期の埋葬人
骨は、顔と下肢の一部が縄文時代人骨に類似しているという(山口敏「梨
木畑貝塚出土の平安時代人骨」『石巻の歴史』第七巻考古編)。
こうした事実から推測されるのは、六世紀末から九世紀の石巻の海岸
地帯は人類学的・文化的に、関東系と現地系が接触し複合する状況に
あったのではないかということである。

7 赤井遺跡を発掘する

私は先の「3 古代史の常識を疑う」で、奈良時代の牡鹿柵は星場圃
を中心とする赤井遺跡にあると推定した。そして、そこに牡鹿郡領の牡
鹿氏(道嶋氏)の居館跡があり牡鹿郡家跡があると想定した。この仮説
の考古学的証明が私の課題としてこのこされていた。

一九八五(昭和60)年、五松山洞窟遺跡の調査がおわり、職場を石巻
高校に変えた。そのころから、地元赤井の新田耕造さん、渥美敏範さん、
斎藤稔男さんから「道嶋探索グループ」は、牡鹿柵跡の発見を目ざして活
動を始めた。矢本町文化財保護審議会も強い関心を示し、三宅を講師に
招くなどして研修を重ねた。渥美さんによると、赤井地区の人たちも地
区内に奈良・平安時代の官衙遺跡、とりわけ牡鹿柵跡があることに興味
関心を示し、赤井遺跡の本格的調査を要望する機運が高まったという。

かくして、町教委は八六(昭和61)年度に発掘調査を実施すること
になった。その直接の発端となったのは、星場の土地造成中に大きな方形
の掘り込み跡が等間隔で発見されたことである。町教委の人と私が現場

を見て驚き、県多賀城跡調査研究所の進藤秋輝さんに通報した。進藤さんは現場に駆けつけ、一言「これは重大なこと」と言った。

発掘調査の実施にあたって、担当課である町教委社会教育課は、県文化財保護課と県多賀城跡調査研究所に指導助言を求めた。それによって、多賀城跡調査研究所が中心となり、県文化財保護課、東北歴史資料館が全面的に支援する調査体制をつくることになった。赤井遺跡発掘調査委員会（鈴木貴答委員長）をつくり、調査担当とした。

ここに至って、私の個人的な課題は矢本町の公的な調査研究事業となり、県の専門的な調査研究機関のバックアップによって本格的に解明されることになったのである。うれしく、ありがたいことだった。

私は、この発掘調査の現場指揮を進藤秋輝さんにお願ひした。進藤さんは多賀城研の研究第一科長であり、古代城柵官衙遺跡研究の最前線に立つ気鋭の研究者である。赤井遺跡は重要な城柵官衙遺跡であると私は考えていたから、その実質的な調査担当者は高い専門性を有する人でなければならぬ。幸いにして、快諾を得た。

かくて同年七月二十一日から八月十四日までを第一次とする調査が始まった。その調査の概要は『赤井遺跡 第1次発掘調査報告』（一九八七年 矢本町教育委員会）で報告されたとおりである。二地区を設定して発掘した結果、次のような遺構群が発見された。

- 第1地区 掘立柱建物跡三棟、材木堀跡、溝跡、竪穴住居跡一軒
- 第2地区 掘立柱建物跡三棟、

掘立柱建物跡というのは、地面に大きな方形の穴を掘り、そこに丸柱を立て、その根元を再び埋めて立てた建物の跡のことである。この建物跡の大きさは、第1地区のSB02掘立柱建物跡で計ると、梁行が三間、桁行が五間で南北に長い建物である。梁行の長さは五・四メートル、桁行が一〇・五メートル、梁行の柱間寸法は一・八メートル（六尺）等間、桁行が二・一メートル（七尺）等間である。すべての柱に抜き取り穴が伴っ

ている。このSB02掘立柱建物跡の西側には材木堀跡と溝跡が伴っていた。これらの建物跡は主軸をほぼ真北方向にとり、六棟おのおの遺構の配置には規格性が見られた（竪穴住居跡は除く）。

こう書いただけでは分かりにくいと思う。問題はこうした遺構群が牡鹿柵、牡鹿郡家、郡司居館の存在を示すのかどうかである。

これはやはり、古代の城柵官衙の建物跡である。その年代を出土土器でみると、土師器の杯型土器が八世紀前半代、須恵器の杯型土器は八世紀前半代から八世紀末葉である。

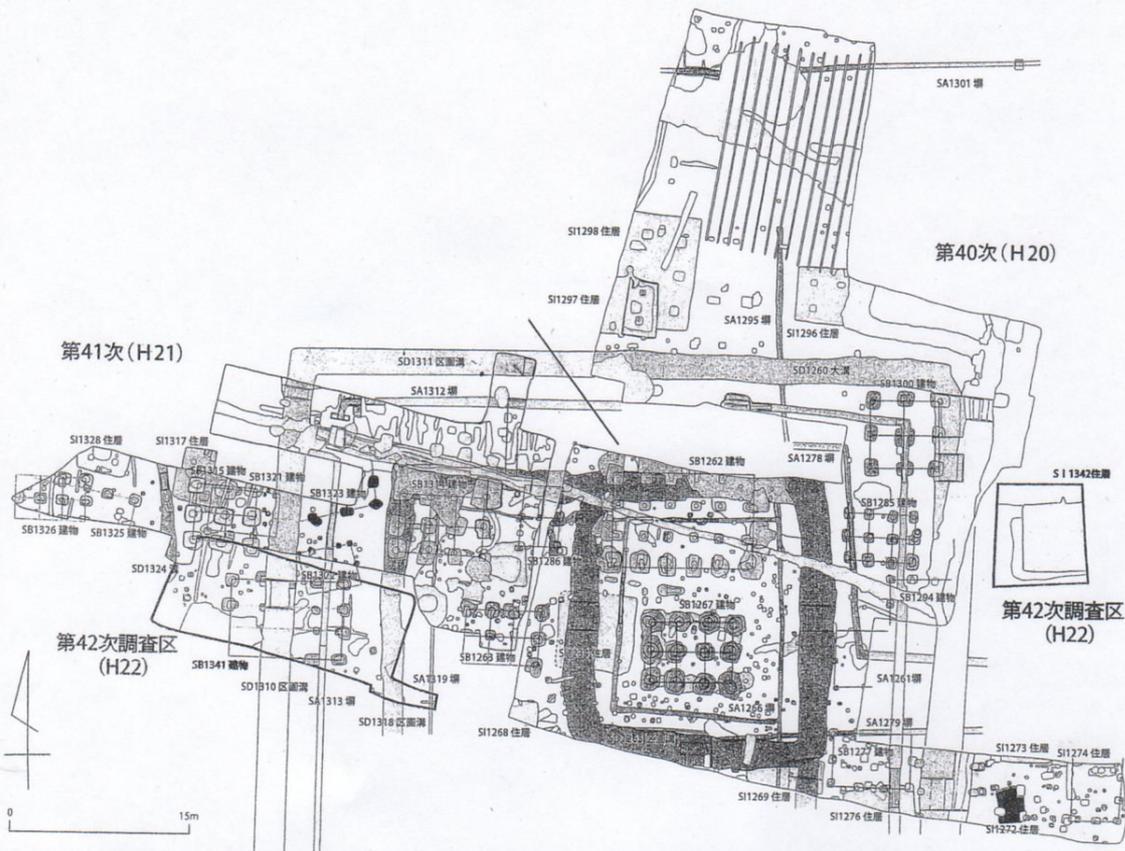
この時期からすると、この建物群は、『続日本紀』天平九（七三七）年四月十四日の条に多賀柵とともに初見する牡鹿柵にあてても矛盾がない。また、この時期の石巻



赤井遺跡第1地区のSB02掘立柱建物跡（南から）
（三宅撮影）

地方は、天平十四（七四二）年正月廿三日の条の「陸奥国」部下黒川郡以北十一郡に含まれる牡鹿郡に相当するから（延暦八（七八九）年八月三十日の条参照）、この遺跡を牡鹿郡衙（郡家）に当てることも可能である。

そして、この遺跡から「舎人」とへら書きした八世紀前半の須恵器の高台付杯三点が出土している。これは矢本横穴墓群出土の「大舎人」墨書土器とともに、そうした下級官人を出仕した有位の地方氏族の居



赤井遺跡の遺構（一部）（東松島市教育委員会生涯学習課「平成22年第42次発掘調査現地見学会」資料より一部抜粋）

宅がこの遺跡に含まれていることを示す。つまり、牡鹿柵、牡鹿郡家、郡司居館があった可能性が極めて高いことを示すものである。

以上に述べたことは、進藤秋輝「第4章考察」（『赤井遺跡 第1次発掘調査報告』矢本町文化財調査報告書第1集 一九八七年 宮城県矢本町教育委員会）による。

発掘の最終日、「三宅さん、間違いない。おめでとう」と進藤さんは言った。「ありがとう、ありがとう。あなたのお陰だ」と私は何度も礼を言った。あの時のことがいまでも忘れられない。

赤井遺跡の発掘調査は翌年も続行された（三宅「赤井遺跡の概要」日本考古学協会編『日本考古学年報39』一九八六年）。その後、矢本町教育委員会は専任職員を配置し、本格的な体制で調査を実施することになる。同町のちに鳴瀬町と合併し、新生の東松島市教育委員会がこれを引き継いで、調査は四十二次まで続いた。調査の度に運河跡や郷名墨書の木簡などが相次いで発見され、驚かされた。

赤井遺跡の全体図は、二〇一〇（平成22）年十一月十三日に実施された第四十二次発掘調査現地見学会資料を見ると分かりやすい。そこには「牡鹿柵・牡鹿郡家、豪族居宅跡推定地」の遺構が示されている。また、「東松島市文化財パンフレット2 古代牡鹿郡のみやこ赤井遺跡―牡鹿柵・牡鹿郡家推定地」は、この遺跡が三期にわたって変遷し、どのような政治的役割と文化的環境にあったかを分かりやすく説明している。「豪族居宅跡」は牡鹿氏（道嶋氏）の居宅跡の可能性が極めて高い。

長年、専門職員として調査を担当した佐藤敏幸さん（54回生）は、二〇〇八年、赤井遺跡を中心とする古代牡鹿地方を詳細に論じた（佐藤敏幸「牡鹿地方における在地社会の変動と古代陸奥国の律令体制形成過程の研究」）。優れた論文である。

こうしたことで、赤井遺跡を国史跡に指定する客観的条件が整った。私がかねて待望していたことである。しかし、二〇一一（平成23）年三月十一日の東日本大地震・大津波の復興事業の関係で、国指定申請は中

断したままになっていると聞いている。

赤井遺跡について私の予想は、このように、ほぼ客観的な事実となつて大方の承認を得ることになった。牡鹿郡のもう一つの城柵官衙に桃生城があるが、これはすでに県多賀城跡調査研究所の調査によって所在地が確定し、その性格も明らかにされている。私の年来の研究テーマである「律令古代における陸奥海道の考古学的研究」は、いちおう終結した感があるが、それはまだ歴史の基本部分を軽くすくつたにすぎない。

石巻地方の古代史は、九六年刊の『石巻の歴史』第一巻通史編(上)古代編で詳細に論じられている。平川南氏(国立歴史民俗博物館教授)、熊谷公男氏(東北学院大学教授)、大石直正氏(同)、進藤秋輝氏(宮城県多賀城跡調査研究所長)による内容豊かな叙述や、第六巻特別編にみる平川氏の「海道・牡鹿地方」、熊谷氏の「道嶋氏の起源とその性格」、藤沼邦彦氏(東北歴史資料館研究部長)の「石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏」といった特論から学ぶところは極めて大きい。私の考古学は同書古代編の一部の叙述と第七巻資料編1考古編の編著が終わつた段階で、ワラジを脱いでもよい状態となった。残っているのは石巻地方全域(旧石巻 桃生 牡鹿地方)の古代史通史を書くことだが、書ききれるかどうか。

8 板碑の考古学を志向

一九九二年(平成4)年、『石巻の歴史』第八巻資料編2古代・中世編が刊行された。この巻は特色のある史料集と思われるが、中でも白眉といわれたのが板碑編である。

板碑というのは、鎌倉時代から室町時代まで建立された石製の率都婆である。石巻市では井内石の板碑が六百三十四基確認されている。平石か角柱に近い石材をもちい、その正面に信心の標識である仏菩薩を梵字で刻み、仏法の教えや功德を綴つた偈頌、供養の年月日、造立趣旨を述べた願文などを刻んでいる。中世の人たちは、これを墓地などに立てて

ホトケを供養し、その功德によって死者の冥福や生者の後生安穩を願つた。石巻地方は井内石の板碑が多く、造立数は関東の武蔵型板碑に次ぐ。

『石巻の歴史』板碑編は、佐藤雄一さん(石高教諭)作成の拓本と釈文で構成しているが、その中で多福院と慈恩院の板碑だけは形の実測図を付けている。これは板碑が立体形であることを示したもので、千葉賢一さん(32回生)の指揮で編さん室が作成した。私は拓本にトレーシングペーパーを当てて文字を書き写し、その文字を実測図に当てはめた。

この作業を進める過程で、私は大きな事実気づいた。板碑の文字が重なっているのである。前の文字が削り取られ、新しい銘文が彫り加えられている。その事実が板碑編で一基ごとに書き加えられたが、井内石の原産地である石巻に、なぜそのように改刻・再利用された板碑が多いのか。そのことは、のちに中世史の新しい問題として取りあげられた。

発見はもう一つあった。井内石板碑は割り石を成形加工した板碑であるということ。拓本で見ると碑面にその痕跡が明瞭に見える。背面の加工痕はさらに明瞭である。この事実の確認には菅松盛行氏(27回生、定時制5回生)に石材加工の実際を学んだ経験が役立ったが、これによって、井内石板碑を無加工の自然石板碑とする七十年間の通説が覆され、これまでの板碑伝播論を全国規模で見直すことの一因ともなった。

九三(平成5)年、私は『石巻の歴史』第六巻特別編に「井内石板碑の成形技法と頭部形式」と題する論考を書いた。また同年夏、川崎市市民ミュージアムで開催された板碑シンポジウム「石に刻まれた古文書」(東国文化研究会主催)に参加した。ここで、考古学の立場から石巻市など北上川下流域の井内石板碑についての知見を報告したのだが、会場の雰囲気はいささか異様だった。板碑専門家たちの批判が坂詰秀一氏(立正大学教授)と私に集中したが、好意的な感じがしなかった。中でも驚いたのは、私に対する次のような批判である。仏教信仰の所産である板碑を、モノ扱いするような考古学はケシカラン!

当日の反省会では発表者の一人から「三宅さんの考えが一般化するに

は十年かかるだろう」と言われた。これが板碑研究の現状だと思った。

◆
九七年に埼玉県越谷市に移住した。私は二〇〇〇(平成12)年、「宮城歴史科学研究」47・48合併号で『仙台市史』特別編5板碑編を高く評価したが、その中で板碑研究の新しい方法論とは何かを述べ、その前提となるのは拓本、実測図、写真、釈文、観察表の五つの方法による板碑の考古学的資料化であると述べた。このような資料化を踏まえた研究は現在、若手研究者の間では常識化している。〇八年三月、東北学院大学大学院での集中講義でも述べたとおりである(関東における板碑研究の現状―考古学的研究を中心に)。同じころ、板碑研究の第一人者である千々和到氏(國學院大學教授)は、「三宅宗議、渡邊美彦、磯野治司、伊藤浩之、佐藤正人らの研究を、「アジア世界における日本の石造物(板碑)研究の先進性」を示すと述べていた(『板碑と石塔の祈り』)。

このような評価がある一方で、私の「板碑の考古学」は、文献史学など考古学とは別の分野の研究者の間から「(これまでの?)板碑研究を破壊した」と批判される側面もある。考古学的な資料化と資料批判の方法とは異なった方法論の開発も必要とされるようである。

二〇一二(平成24)年五月、日本考古学協会総会・研究大会があり、セツシヨン「板碑研究の最前線」で時枝努氏と磯野治司氏が報告した。その中で三宅の研究について言及している。自分で引用するのもおかしいが、当日配布された発表要旨の一部を紹介しておきたい。

時枝努氏(立正大学教授)は「趣旨説明―板碑の概念」の中で、板碑の考古学的研究は平成初年ごろから活発化したと述べている。「板碑の実測図が作成され、詳細な観察記録が公表され」るようになったとし、板碑製作の工程などが議論できる資料的環境が整えられたとしている。

「その背景には、石器研究で培われたノウハウを板碑に適用し、板碑の考古資料としての特色を読み取る方法を積極的に開拓した三宅宗議らの努力があり、板碑研究の基礎を打ち立てたことの意味は大きい」とも述べている。また、氏は論文注で「三宅宗議の武蔵型板碑に関する論考だ

けでも(論考名省略)多数にのぼる。これらの一連の研究を積み重ねることによって板碑研究の基礎的な方法論が培われ、それが若手の研究者に大きな影響を与えた」と評価している。

◆
磯野治司氏(北本市役所)は「板碑の研究史と起源」の報告の中で、板碑研究の画期となったのは、平成五年、川崎市ミュージアムで開催された「石に刻まれた中世」であったとし、「坂詰秀一の講演及び三宅宗議の報告によって提起された考古学的な視点や実践例によって、板碑研究の方向性」が明確になったと述べている。そして、平成年間に入ってから首都圏での板碑研究の方向性とは、a産業論的な研究、b技術論的な研究、c機能論的な研究、d資料論的な研究であるとする。三宅はa b dの三分野で新しい方向を示しているとした。

私のワラジ履きの考古学はこんなところであるが、最後にひとつだけ現況を付記すれば、埼玉県比企郡小川町にある緑泥石片岩の採掘遺跡が、二〇一四年十月、「下里・青山板碑製作遺跡」として国史跡に指定された。〇一年いらい注目し、研究仲間と一緒に調査して来た中世の武蔵型板碑の生産遺跡である。

(II おわり)



「うたう」 みやけしゅうぎ
2013年
東京・大久保 高麗博物館主催行事で